

人間学科共通科目「人間学」講演

桜梅桃李 自分らしく輝いて

久本 雅美

日時：2021年5月27日午前9時

会場：創価大学AB101教室

おはようございます。ご紹介いただきました久本雅美と申します。創価大学開学50周年おめでとうございます。創価大学生の皆さんと会えるのを楽しみにしておりました。少し緊張していますがよろしく願います。

夢がある方や、これからの進路を考えている方もいらっしゃるでしょう。そんなみなさんに「自分らしく輝いて」と呼びかけたいという思いで今日のテーマを決めました。

いろいろなテレビ番組で私を見かけたことがあるかもしれません。しかし、そもそも久本雅美という人物はお笑い芸人なのかタレントなのか、いったい何者なんだろうと思う人もいるでしょう。実は私の本業は「ワハハ本舗」という劇団を37年間やってきた舞台女優なのです。ではどのようなことを行っている劇団なのか、私がどんなことをしているのかを、みなさんにまず知っていただくために紹介動画をご覧ください。

—ここで、ワハハ本舗の紹介動画を視聴—

こんなことを37年間やっていました。この動画にあるようなものだけではなく、ファンタジーな世界観のものやシュールなものなど、いろいろな内容を幅広くやっております。柴田理恵さんもこの劇団でいっしょにやっている仲間です。それぞれがそれぞれの個性を活かしながらいろいろなタイプの笑いを追求しているのが私たちの劇団です。37年間も続けているのは見てくださるお客様がいらっしゃるからこそだということも実感しております。

お笑い好きの少女時代から短大時代まで

私は小さい頃から人前で面白いことをしたり話したりして、とにかく笑ってもらうことが好きでした。ある番組で家族のルーツを探ったのですが、私の母方の祖父と父方の祖父、この二人の祖父がおやま（女形）で人気を博していたと知って驚きました。これはもう血筋だなと。使命なんだと。

小学校高学年の時はドリフターズが全盛期でしたので、ドリフターズのようなコントを自分で考えて、友人と練習して、先生や生徒の前で発表したりもしていました。そんな私を見て、先生は私の両親に「娘さんは進学するか吉本に行くかのどちらかですよ」と言っていました。でもお笑いのプロになろうとまでは思っていませんでした。そして短大まで行かせてもらって、その先の進路をどうしようかと迷っていたとき、母が「あなたはOLには向いていないから、何か好きなことを考えてやったほうがいいのではないか」とアドバイスをくれたんです。その当時、ラジオで人気のディスクジョッキーという人達がありました。いろんな方がそれぞれの個性を発揮してトークで番組を盛り上げるのです。とても面白く素敵で、自分もおしゃべりを活かして、ディスクジョッキー、つまりラジオ・パーソナリティーをやりたいなと思うようになり、短大に通いながら授業の後に、週に1・2回、アナウンサー養成学校に行くことにしました。

そこで仲良くなった友人と、吉本興業主催の素人参加の演芸大会に挑戦したことがありました。漫才でも落語でもマジックでも何でもいいという大会

で、優勝賞品の海外旅行を目あてに、その友人と二人で、漫才で出場。そうしたら何と優勝してしまい、賞品のシンガポール旅行にも行きました。それでもまだお笑いのプロになろうとは思っていませんでした。

一緒に漫才をした友人は、東京に行って舞台女優になるのが夢で、私は彼女の夢を応援していました。たまたま二人で東京へ遊びに行く機会があり、当時人気絶頂だったお笑いの「劇団東京ヴォードヴィルショー」ⁱと一緒に見に行きました。それが私にとってあまりにも衝撃的だったのです。大阪の吉本新喜劇や松竹新喜劇になじみはあったのですが、それとは違うパワフルでエネルギーがとて新鮮でした。お腹を抱えて笑いながら、やっぱりお笑いってすごい！なんてカッコいいんだろう！私もみんなに笑ってもらえるようなお笑いの女優さんになりたいと、感動と興奮で友人の手を握りながら、「私も東京へ行く」、「この劇団に入って笑いの女優になる」と決意したのです。

私の家は厳しく、門限もあり外泊も禁止でしたが、私はそれを幾度も破って、反抗ばかりしていたやんちゃな娘でした。大阪から東京に出ると言うようなことは絶対に反対されるだろうと思い、親に内緒で東京に行く準備をしました。アルバイトでお金を貯めて、こっそり東京に行って住む家も決めました。しかし、さすがに親に黙ったまま東京に行ってしまうわけにはいきません。意を決して両親に「東京に行って劇団に入って女優になります」と言うと、親は案の定びっくりです。演劇の経験が全くない娘がいきなり東京に行って女優になるなんて驚くのも無理はありません。私は両親に「もうその劇団に合格している」と言いました。でも、実際は毎日のように入団申し込みの電話を劇団にかけて、そのたびに「今回は新人を誰もとらない」と断られ続けていたのです。親を説得するには、ウソをついてでも行くしかない！と、勢いと情熱でいっぱいでした。親は「この子は言い出したら聞かないし、仕方がない」と半ば諦めてうなだれていました。

劇団東京ヴォードヴィルショーへの入団と葛藤

出発の日、いよいよ東京へ向かって車を出そうとしたとき、ちょうど父が帰ってきて、「どこいくんだ」と聞かれて、「ちょっとドライブ」と言って、そのまま東京へ。後々、父は東京へ行って帰って来ない私に「長いドライブやなあ」と笑っていましたが。お父さん、お母さん、大丈夫！私、絶対に活躍する！と、夢と希望に満ちあふれての出発でした。そして直談判するため劇団に向かいました。その日は雨が降っていました。「ぴあ」という雑誌に劇団の住所が載っていますから、それを片手に劇団を探しました。履歴書を持って雨の中やっとの思いで劇団に着いたのですが中に入る勇気がなくて躊躇しました。

よく見たらガラス越しのドアの向こうに靴がいっぱいある。「どうしよう、稽古中にきてしまった」……「絶対に無理だ」……「人がいっぱいいる。どうしよう」……そう思って劇団の周りを何周も回っていましたが「なんのために来たんだ」と自分を鼓舞して意を決してドアを開け、下を向いたまま、「東京ヴォードヴィルショーに入れてください！」と叫びました。しかし返事がありません。顔を上げると誰もいない。そこにあった靴は上靴だったんです。

しばらくすると、マネージャーさんが出てきて、「キミか。毎日入れてほしいと大阪から電話してきたのは」と言われ、「仕方がないから座長の佐藤B作に会わせてあげるよ。それで面談して気に入られたらいいけど、もしダメだったら諦めてね」と言われました。「ついに始まる」という気持ちと、自分の大胆さと緊張と興奮があわさって涙が出て、どうやって家に帰ったのか覚えていないくらいでした。

そして面談の当日、緊張して、トイレに行ったのですが、出ようとしたらトイレのドアが壊れていて出られなくなってしまったんです。どんなに叩いても引いても全然開きません。「これから面接なのにどうしよう、遅刻して

しまう」と焦りました。トイレに小さい窓があり、そこから「助けてください！」と叫んでいたら目の前に住んでいたアパートの大家さんがびっくりして「どうしたんだ」と。それでドアのカギを壊して開けてくれて、無事にトイレから出ることができ、慌てて向かいました。

着いた時間は完全に遅刻でした。「すみません！遅刻しました！」と言いながら入ると、そこには佐藤B作さんがいました。B作さんに「土足で入っちゃダメだよ！」と叱られ、私は靴を脱ぐのも忘れるくらい舞い上がっていました。そのインパクトがすごかったみたいで、B作さんは今でも「土足で入ってきた女」と笑い話で語ってくださいます。

その日、もう一人面接を受ける女の子がいて、その子は「ダンスもできます」「芝居もやってきました」「立ち回りも殺陣もできます」などとたくさんアピールしていました。私の番になって、B作さんに「君は何ができるんだ？」と聞きかれましたが、私は勢いだけで来てしまったと素人なので、何もアピールできるものがありません。私は思わず、「元気です！」と答えていました。するとB作さんは「元気が一番だなあ」と笑ってくださって、それで何とか合格したんです。その半年前には柴田理恵さんも直談判で入団していて、B作さんは彼女に「大阪から面白い女が来たからお前と一生のコンビになるかもな」と言ったそうです。B作さんの先見の明というものでしょうか。その言葉通り柴田さんとは長いつきあいになりました。今も励まし合いながら一緒にやらせていただいています。

いよいよ新しい生活が始まりました。憧れの劇団に入って夢と希望に満ち溢れて怖いものないくらい、何でも来いという思いでぶつかっていましたけれども、そんなうかれた生活はあっという間に終わってしまいました。すぐに現実の厳しさにぶつかりました。プロとアマの笑いは雲泥の差です。友達を集めて面白いことをしていただけた素人が、命をかけて人生かけてやっている先輩方に太刀打ちできるわけがありません。演劇もやったことが無いので、一つ一つ覚えていきました。怒られながら学んでいくのが当然です。「真っ直ぐ立て」と言われてもぶれてしまっていて、興奮して話していたら

「お客さんにお尻向けているよ」と指摘されたりもしました。お題をもらってお題に即して即興で面白いことを演じるというエチュード（練習課題）があるのですが、先輩方の力の凄さを目の当たりにし、私は稽古場の隅で体育座りしながら「すごいな」と思いながら見ていました。自分の番になったとき、「はい！」と返事だけはよいのですが、毎回怒られて自信を無くしてしまっている私は、何がおもしろいのか、どうしたら笑ってもらえるのか……思い悩んでばかり。夢と希望に満ち溢れていた日々が不安と焦りに変わっていきました。そして、1年2年があつという間に過ぎて行きました。

新劇団ワハハ本舗への移籍

そして3年目になった時、若手の間で東京ヴォードヴィルショーを辞めて新しい劇団を作ろうという話が湧き上がりました。私は悩みました。劇団に残ってそこから申し上がって頑張るか、自分たちの力で勝負する道に行くか、迷いました。2時間の中で5分出演できればいいくらいの舞台上、大勢の中で自分はどうやって目立っていけるのか。先輩方が作ってきた劇団というレールの上を走るより、自分でレールを作ったほうがいいのか。本当にできるのか。痛い目を見るかもしれない。でも自分でやってみて、痛い目を見ないと、本当に自分が向いてるのか向いてないのか、面白いのか面白くないのか、分からない。いろいろ悩みましたが、やはり自分たちのやりたいお笑いをやっこう！一からスタートして自分に力をつけていっこう！と決意し、「ワハハ本舗」ⁱⁱという劇団を旗揚げしました。

再び夢と希望に満ち溢れて出発しましたが、環境が変わっても何も変わっていないことに愕然としました。自分が何も変わっていなかったからです。相変わらずどうやったら笑ってもらえるんだろう、何が面白いんだろう、自分は向いているんだろうか、それらの答えがつかめないうままでした。何をやっても正解が見えない、分からない。そういうときは人の意見に流されるものです。誰かが「僕はこう思う」と言ったら納得し、「私はこう思う」と

言われたらそれにも納得して、いざ自分はどう思うのか聞かれても何も答えられない。自分の意見がなかったのです。そして、常に自分と他人を比べてしまっていました。「あの人に勝っている、負けている」、「今自分はどうか思われているか」などばかりが気になっていて、どんどん行き詰っていくわけです。こんな性格じゃなかったのにどうしてだろうと、自己嫌悪に陥りながらも、それでも何とか頑張りたい！とカラ元気とカラ回りの日々でした。

「桜梅桃李」の生き方を知る

そんななか、演出家に呼ばれて、こう言われました。「久本、君は普段は面白いのにどうして舞台でそれが出ないんだ？」と。役者は舞台で輝いてなんぼです。普段面白くても舞台でそれが活かせないようでは意味がない。これもまた自分のなかのコンプレックスでした。悶々とした日々が続きました。

そんなときに元東京ヴォードヴィルショーで一緒だった女の子と再会します。その子はすでに演劇を辞めていたんですが、とても元気ではつらつとしていたんです。もともと面白い子ではあったんですがはつらつというイメージはありませんでした。あまりにも変わっていたので「どうしたの？」と聞くと、その子が「桜梅桃李」ⁱⁱⁱという生き方を教えてくれたんです。梅は桜になれないし李も桃にはなれない、それぞれ個性がある。咲かせる花も違えば咲かせる時期も違う。自分らしくみんな輝いている。だから比べるんだったら人と自分ではなく昨日の自分と今日の自分を比べていくという生き方があるんだと教えてくれたのです。

その言葉ひとつひとつが心に響きました。「自分らしく輝きたい」、「人間には無限の可能性がある」。人でもない、環境でもない、自分を磨いて輝くことに価値があるんだと。目から鱗が落ちました。人と比べるのではなく、自分らしく輝いていこう！そんな生き方が自分の真ん中にできたわけです。そうするとものの見方考え方が変わっていきました。いろんなことがあって

もすべて意味があるんだと思えるようになり、何があっても負けない意志が持てるようになりました。元気と勇気と希望が湧いてきました。

そんな私を見て、柴田理恵さんが「どうしたの？いくら怒られても元気にしているけど、何かあったの？」と聞いてきたんです。私は柴田さんに「桜梅桃李」という生き方があることを話しました。柴田さんも「私もそういう生き方がしたい！」と感動してくれて、今も励まし合いながら共に前進しています。

自分が変わると周りも変わってきます。芝居が変わりました。そして劇団も変わっていきました。第3回公演で「そこぬけ」という舞台がありました。それはさまざまな怪奇現象が起きる館にいろいろなエキスパートが怪奇現象を探って追究していくという内容で、降霊術に長けているセーラー服の少女の役でした。演出家が「降霊の役を二人羽織で表現できないか」と言ってきたんです。ワハハ本舗は基本的に演出家が中心でやっていますが、自分のシーンは自分で考えるというやり方でした。それで、ペアでやっていた男の子と相談しながら、悪魔になったり少女になったり、手の動きと表情で二人羽織を活かした笑いを創り上げ、演出家に見せたら、「僕が思っていた以上におもしろいものを作ったね」と喜んでくれて、舞台のワンシーンで「オカルト二人羽織」として演じました。そしたらそれが「とても面白い」と大評判になったんです。

それまで私はかわいい役が多かったんですが、実はそれが嫌でした。もっと自分を崩したい、もっと暴れたいと思っていました。そしてこの「オカルト二人羽織」で変顔をしたり悪魔の声を出したり少女の声を出したりしたことで自分の殻が一つ破けたんです。本当に嬉しかったです。それを見たいいろんな方から声をかけていただき、今でいう「エンタの神様」のような、プロの芸人さんのネタ見せ番組にも出させていただきました。加藤茶さんと志村けんさんの番組にも呼んでいただきました。このお二人がどうしても「オカルト二人羽織」を見たいということで、番組で使っていただきました。それ以外にもいろんな番組に出させていだいたんです。

「女囚漫才」でテレビの人気者に

そして第4回公演では「女囚漫才」というのをやりました。当時劇団には女性が4人しかいなかったのですがその4人で、「女の囚人が笑いをとったら刑が軽くなる」という設定で漫才をしたんです。それまで私は標準語でお芝居ができるようになるため、大阪弁禁止だったんですが、漫才ということで大阪弁が解禁になりました。新喜劇のようないろいろなギャグを活かしてやってみてほしいと言われ、大阪弁を駆使しながらみんなで漫才を作り上げました。今はたくさんの女芸人さんが活躍されていて認知されていますが、30数年前は女だけでワンシーンを持つというのは考えられませんでした。だいたい男性がいてその傍に女性がいて、男性の横で女性が笑いをちょっと取るとか、女性がいても男性がフォローするというのが一般的だったので、20分間も女性だけでやるというのは画期的なことだったんです。同じ劇団の男性たちも心配してくれて、私たち自身にも不安がありました。でも演出家が「絶対大丈夫」と言ってくださって、一生懸命考えて取り組みました。実際にやってみると、一番ウケたんです。嬉しいことに年末に「ぴあ」という雑誌が「今年一番笑ったのはワハハ本舗の女囚漫才だ」という批評を書いてくれたのです。それを見てみんなで手を取りながら楽屋で泣きました。

そうして評判が広まっていく中で、フジテレビの「冗談画報」という番組でワハハ本舗を取り上げてくれました。それは新しいタイプのミュージシャンやパフォーマーや漫才師、コント師などを紹介するという深夜番組でした。テレビの効果は絶大でした。当時100人入れば息が詰まるくらいの新宿の小さな劇場でやっていたのですが、二階から外を見たら下に列ができていてたくさん並んでいたんです。あまりにも長蛇の列だったので、私はお手伝いの子に「どこでバーゲンやってるの？」と聞いたんです。そうしたらその子が「違います！ワハハ本舗のお客さんです！」と。慌てて「帰らないでください！」とお客さんに叫びました。そして、昼・夜・深夜公演をやったん

です。すべて満員御礼。深夜公演も夜10時にもかかわらず満杯という、あの時の感動は忘れられません。そうしていくなかでマスコミの方が見に来てくださるようになりました。プロデューサーさんやディレクターさんが常に面白い人材を探していたんです。

そして当時、タモリさんの「今夜は最高」という番組から、コントでの出演オファーをいただき、ワハハ本舗の女優陣が出演しました。初めてのテレビ番組のレギュラー出演となりました。ラジオからも二つの番組からお声がかかって、有難いことにどちらも人気番組だったのですが、昔から聞いていた「オールナイトニッポン」を選ばせていただきました。

そのほか、情報番組のリポーターをやったり、バラエティー番組でもいろんなことをやらせていただきました。お仕事が一気に広がり、劇場だけだった自分の活動の場がいわゆる芸能界という世界にも広がっていきました。

人生の師との出会い

忙しくなったら忙しくなったなりの悩みができました。若い頃は業界自体がお金もあるし制約や規約がないので、今やったら訴えられるような爆発的なバラエティーをいろいろやっていました。私も当時は体を張って、八景島シーパラダイスで「シャチの背中に乗れるのか」という企画をやったり、釣り堀の中で自分がフナになって突然浮き出て釣り人を驚かしたりというようなことをやっていました。ものすごく過激なことをしていたので、よく人から「女を捨てている」、「下品だ」と言われました。そういうのを好んで見てくれる人もいれば、はっきりと嫌う人もいました。それはもう仕方がないことだと割り切っていたつもりでしたが、やはり批判をされるとめげていくわけです。「私のお笑いはあまり喜ばれていないのかな?」、「間違っているのかな?」と思うようになりました。どんどん自分に自信がなくなっていきました。叩かれるうちに心が弱くなって「私の使命って何だろう」、「私のお笑ってなんだろう」、「人に迷惑かけているのかな」と思うようになり、仕事

が終わるたびに泣いていたときもありました。

そんなときに、私にとって人生の師でもある創立者池田大作先生と出会うことができたのです。ある会合で先生が入場される前に、その会合を盛り上げるために柴田理恵さんと私と二人で掛け合い漫才を3分くらいやってほしいと言われました。「こんな自分が」と思って不安しかありませんでしたが、たくさんの人に励まされ、心が前向きに変わっていきました。

どんな人と生きていくのかって、大事だと思うんです。私の周りには素敵な人がいっぱいいます。悩みがあっても逃げることなく、ちゃんと自分と向き合いながら人のために社会のために頑張っている人がいっぱいいます。そういう人と出会うと心が洗われるんです。勇気や希望をいただいて、元気になるんですよね。ところが愚痴ばかりの人と一緒にいると自分も愚痴っぽくなってしまいます。お金のことしか言わない人と一緒にいたらお金のことしか考えなくなってしまう。喧嘩ばかりする人と一緒にいたら喧嘩っ早くなってしまう。ですから誰と一緒に生きるかって本当に大事だって思うんです。善い友は本当に宝です。そんな激励の達人のような人たちが周りにたくさんいて励ましてくれて、与えられた目の前の使命に誠実に向き合っていこうと思えたのです。

そして柴田さんとも励まし合いながら「この使命をしっかり果たそう」と決意して挑みました。みなさんに守られていると感じながらの3分間の漫才でした。みなさんも喜んでくださいました。そのあと席に戻って待っていたら、池田先生が入場されると同時に「久本さん！漫才おもしろかったよ！お腹抱えて笑ったよ！」って言ってくださったんです。私たちの漫才をモニターで見てくださいましたね。そして、笑って、面白いとってくださいました。驚きと感動で何が起こったのかわからないくらいでした。そして「ちょっとおいで」と呼んでいただき、私と柴田さんは真心こもる激励をいただきました。「希望です。希望の女優さんになってください」、「悲観も悲嘆もいりません。希望なんです」と言われ、私が思い悩んでいることを全部受け止めてくださって、「負けるな、頑張れ」と大きな慈愛で包み込んでく

ださいました。そして、「僕のことをお父さんと思うんだよ。娘なんだから。何かあったら言うてくるんだよ」との心強い励まし、力強いお言葉に、感謝と感動の涙でいっぱいになりました。帰ってからも感動でいっぱいになりながら、いつも人からどう思われているのか気にしていた自分を省みて、「そうだ、みなさんに喜んでいただけるような自分を作っていきしかないじゃないか。成長して、いただいた激励にお応えしていこう！」と決意し、心新たに出発することができました。

その後も、菌を食いしばりながら困難を乗り越え、励まされながら前へ進んでいく、そうやっていくなかでまた新しい壁にぶつかっては乗り越えながら進む、そんな繰り返しのなか、仕事と舞台の両立が難しくなった時期がありました。レギュラー番組を10本くらい抱えるようになってすごく忙しかったんです。でも舞台の稽古はしっかりやらなければいけない。ダンスもあれば重要なシーンも考えなければいけない。舞台でも面白いと言われたいし、テレビでも面白いと言われたい。この二つの思いがあるのですが時間的に稽古に行けなかったり、疲れてしまって考えがまとまらず、いくら頑張ろうと思っても稽古が追い付かない、自分のやっているシーンもうまく演じることができない、もうどうしたらいいのかと思い悩みました。中途半端な演技をしている自分が嫌で、しばらく舞台を休んでテレビに専念しよう、テレビが落ち着いたら舞台に戻ってきたらいい、と思いだしたんですね。

そんなとき若手の舞台が新宿の小さな劇場でありまして、仕事終わりに見に行きました。二階から見ていたんですけども、若手が不器用ながらもがむしゃらにまっすぐに一生懸命お客様に笑ってもらおうと頑張っている姿に心を打たれ、涙があふれました。「そうだ、この情熱を忘れたらいけない！私は忙しさに流され、環境のせいになっていた」と思いました。よく池田先生も「環境が主役だなんてつまらないよ。人生の主役は自分だよ」とおっしゃることがありますが、「忙しいから無理」、「両方は無理」と逃げていた自分に気が付きました。お笑いの舞台がしくて東京に出てきたその原点を忘れていた、そして現実に流され自分を見失っていたと、負けたらいけない、逃

げたらいけない、それが本当に力をつけることだと目が覚めたんです。感謝しかありません。そこから両方やり切ろうと腹を決めました。

先輩にこう言われたことがあります。「志というのは心の指すほうにしかな行けないよ」と。本当にその通りだなと思いました。できると思ったらできる、できないと思ったらできない、その言葉でまた目が覚めたんです。そうやってまた自分を鼓舞しながら頑張ろうと前へ進むことができました。

女性タレント好感度ナンバーワンに

池田先生から大きな激励をいただいてから8年後の2001年に、NHKの好感度調査女性部門ナンバーワンになりました。それから3年連続でナンバーワンにならせていただきました。「下品だ」、「女を捨てている」、「見たくもない」と言われていた私が好感度ナンバーワンになった時には、笑いの先輩が「時代が変わったな」ととても喜んでくださいました。本当に有難いです。一つの形として池田先生や励ましてくださった大勢の方、そして家族に恩返しのできたかなと思えた瞬間でもありました。

家族はいつも応援してくれていました。父と母は私が東京出たときは本当に心配で心配でしかたがなく、お見合い写真を送ってきたりもしましたが、私が本気だということが分かると大の応援団になるよと言ってくれました。その母がある番組で、家族で出演したときに司会者の方が「娘さんは下品だと女捨ててるとか言われていますが親としては恥ずかしくないですか？」と質問したんです。すると母は「私の娘は10人中10人に好かれることはなかなか難しいと思います。でも、二人でいいんです。二人だけでも、うちの娘を見て元気になってくれればそれでいいんです。その気持ちを大事にしてもらいたい」と、そう言ったんですね。私は感動しました。その母が亡くなる最期まで私に言ったのは、「実るほど、頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」という言葉で、ずっと謙虚でありなさいよ、誠実であるんだよということを言い続けていました。母はガンだったのですが、愚痴を言うこともな

く、口から出るのは感謝の言葉ばかりでした。「ちょっと横になるね」というのが最期の言葉でした。みんなに見守られながら安らかに旅立っていきました。

父も町内の人気者だったんです。老人会の会長、町内会の会長と、人の世話をすることが好きでいろいろな場所を回りながら私のことを宣伝して歩いておりました。本当に世話好きで、あまりにも遅くまで帰ってこないの心配していたら、実は一人暮らしの老人の家に行っては話を聞き歩いてたということでした。そんな思いやりのある両親に育てていただきました。私のわがままを受け入れて、私の好きなようにさせてくれて感謝の思いでいっぱいです。今も自分が本当に誠実に、人のため、社会のためにお役に立てる存在になって、何があっても負けない人生を、自分らしく輝いていける価値ある人生を歩んでいくことが亡き父母への親孝行だと思いながら自分で自分を励ましています。

絶望のときの“粘り”が人生を勝利に導く

人生はいろんなことがあります。今だってコロナ禍で規制があって、思い描いていた通りの生活ができないかもしれません。私自身もコロナの関係で舞台が3本中止となりました。そんな中でどうやって生きていくのか、時代が変わり、人が変わっていく中で自分もどうやって自分らしく輝いていくか、悩みが山積しているわけですがそれでも、「負けたらあかん」という気持ちでいっぱいです。

私が座右の銘にしている池田先生のご指導がありますので皆さんにご紹介したいと思います^{iv}。

人間にとって大事なことの一つは、“粘り”ということなんです。あの意味で、人生は、絶望との戦いであるといえるかもしれません。テストの結果もよくない。家庭環境も大変である。経済的にも厳しい。理想

と自分の現実との間に、大きな隔たりがある——など、悩みの連続が人生であり、特に青春時代です。

そして、ともすれば、“自分はダメな人間なんだ” “なんの力もないんだ” と考え、卑屈になり、絶望的な思いをいだいてしまう。しかし、そうではありません。“みんなが、尊い使命をもって生まれてきている。必ず自分らしく輝くことができる。”

では、どうすれば、自分を輝かせていくことができるのか。それは“粘り”です。

思うような結果が出ない。失敗する。挫折する。時には、生きる気力さえなくなってしまうかもしれない。それでもまた、立ち上がり、自分の目標に向かって進んでいく。その粘り強さこそが大事なんです。

“力がなくてもいいじゃないか。かっこ悪くたっていいじゃないか。でも、自分は負けないぞ！”と、心の炎を燃やすことです。

順風満帆に生きて、苦勞もせずに、成功を収めた人などいません。失敗も、挫折もなく、人生の勝利者になった人もいません。泣く思いで苦勞に耐え、何度も絶望の淵に立ちながら、粘り強く、前へ、前へと進んでいった人が、人生の勝利者になっているんです。

たとえ、失敗や敗北はあっても、絶対に腐ってはならない。いじけて、自らを卑しめることこそが敗北なんです。忍耐強い人が、最後に勝つ人なんです。

人生の勝利の栄冠は、信心を根本に、執念に執念を尽くし、粘って粘って粘り抜き、自分の決めた道を歩んでいった人の頭上に輝くことを宣言しておきます。

みなさんも今後の人生さまざまな困難や苦勞があると思います。でもそうした経験があるからこそ力もつくし、人のことを思いやれる自分になることができます。そうであってこそ人生を楽しめると思うんです。皆さんの人生まだまだこれから決して人と自分を比べることなく自分らしく輝いてって

いただきたいという思いでいっぱいです。そしてまた池田先生は、秋桜の花を通してこのようにご指導もしてくださいました^v。

秋桜（コスモス）は一年草。

だから、この秋に——ただ一つの秋に巡り合うために生まれてきた。

ただ一つの笑顔を青空にほめられたくて、背を伸ばし、伸ばししている、その一途さ！

だれのまねもしていない。

だれをうらやみもしない。

一心に、本気で生きている彼女には、くよくよするひまもない。ただ、かけがえのない今を生きるだけ。だから楽しい。苦しくても楽しい。

人も、この一生（ひとよ）に、ただ一つの花を咲かせるために生まれてきた。

自分にしかできない自分の使命（つとめ）を開花させるために。何かあるはず。自分にできる何かがあるはず。

自分にできることを、すべてした人。その人が「花」だ。

だから、あなたよ、花と咲け。二度とない人生。だれに遠慮がいるものか。花と咲け。

花よ咲け。心に咲け。暮らしに咲け。大きく咲け。

心の花こそが、この世の旅路のその果てまでも、あなたを飾る明かりとなる。

皆、使命があって生まれてきた、自分にしかできないことがあって生まれてきた、そのことを忘れないで、どうか自分らしい花を咲かせてください。

(大拍手)

【質疑応答】

女子学生A：久本さんはテレビや舞台で活躍されていて、時にはリーダーとして人を引っ張っていかないといけないときもあると思います。久本さんにとってのリーダーの資質って何だと思われますか？

久本雅美：リーダーと言っても目の前の一人を大事にすることから始まるのではないのでしょうか。大勢の人に向かって言わなければいけないときもありますが、本質はやはり一人一人と向き合ってその一人を大事にしていく誠実さがリーダーには必要だと思います。

女子学生B：久本さんが舞台上に立つときに最も意識していることは何ですか？

久本雅美：舞台というのはなまものですから、その日によってお客さんの反応が全然違います。自分の生命力というか、内面から出る思いがちゃんと燃えているかどうかを意識しています。「今日も喜んでいただく」、「今日も100%の力を出していこう」、「来ていただいた人たちにいい時間だったと思っていただく」、「明日の活力にしてください」というように自分の心が燃えているかどうかということです。どんなに疲れていても、お客さんに笑っていただくと自分も元気になります。みなさんに喜んでいただくの思いがありつつ、同時にお客さんによって自分も喜びをいただけるお互いの空気感があります。まずは自分から楽しんでいただく、喜んでいただくという、心を燃やすということが大事だと思っています。

男子学生A：番組やネタのなかで、人を活かして笑いを取ることもあると思いますが、そのときに意識していることがあれば教えてください。

久本雅美 : お笑いなので人にツッコむことは仕事でもあるのですが、相手の良さを活かすツッコミを心がけています。ただの意地悪ではその人だけでなく、みんなが嫌な気持ちになります。私は人の気持ちを考えずに傷つける人が一番下品だと思っています。そのため相手の良いところ、素敵なおところだと自分が感じていることを素直に言うことだと思いますし、相手の個性を活かしたことを言ってあげられることが大切だと思います。その前提として、相手の良いところを知ろうとする思いやり、優しさが大切だと思います。

女子学生C : 久本さんは長く活躍してこられました、今後に向けてさらなる夢や目標というものをお持ちでしょうか。

久本雅美 : 芸能生活40周年目になるのですが、私は生涯現役でありたいと思っています。テレビ番組や舞台も、生涯現役で挑戦し続けたいというのが夢です。

女子学生D : 大学生になって挑戦したいことがたくさんあるのですが諦め癖が付いてしまっていて、あと一歩が踏み出せません。どうしたらいいでしょうか？

久本雅美 : 先ほども言いましたが、粘りだと思います。あと一歩、もう一歩という気持ち、今の自分を乗り越えるという強い気持ちを持つこと。人生は努力ですから。諦めそうなとき、あともう一歩、あともう少し頑張るといふ方向へ自分の命を切り替えていくことへの努力。そうでないいつまで経っても悶々としたままになってしまいます。挑戦できるかできないかではなく挑戦する心があるかどうか。何もやらない後悔が一番の後悔だと思います。明確な目標があるなら、諦めそうになったときにあともう一歩と自分を鼓舞しながら粘り強く執念深く戦う、壁を破るという努力をして

いくことが大切かと。努力が習慣になって本質になります。負けないという気持ちで努力していくと、負けない人になっていく。それがその人自身の人間革命だと思います。自分のここがダメだと分かっていること自体が大勝利ですもの。悩みがない人はもったいないです。悩むからこそ変われる。あとは努力です。この癖をつけていくことが大事と思っています。(質疑応答終了)

今日は本当にありがとうございました。いろいろ厳しい世の中ですが必ず自分らしく咲かせる花がありますのでどうかみんなで切磋琢磨しながら自分の人生を歩んでいってください。またお会いしましょう。ありがとうございました。(大拍手)

注

- i 劇団東京ヴォードヴィルショー 俳優・佐藤B作氏が主宰する舞台劇団。大衆に親しみやすい軽演劇、喜劇を得意とする。1973年結成。主な所属俳優に佐渡稔、山口良一、あめくみちこらがいる。
- ii WAHHA本舗 劇団東京ヴォードヴィルショーに所属していた舞台演出家・喰始(たべはじめ)氏が同劇団の若手俳優と共に独立する形で1984年に結成した舞台劇団。既成の枠に囚われることなく、破天荒でコミカルな喜劇を思い切りよくパワフルに演じる。主な所属俳優に久本雅美、柴田理恵、佐藤正宏、梅垣義明らがいる。
- iii 桜梅桃李 出典は「桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作の三身と開見すれば、これ即ち『量』の義なり」(「御義口伝下 無量義経六箇の大事 第二量の字の事」御書全集784ページ、新版1090ページ、現代語訳「桜は桜、梅は梅、桃は桃、李は李と、おのおのの当体を改めることなく、そのまま無作の三身と開き示していけるならば、それこそが『量』の字に込められた、一切を包摂するという意義なのです」)。これに関連して創立者是对談のなかでこう述べている。

仏法には、花に譬えて万人の尊厳を表す、「桜梅桃李」という法理があります。桜も梅も、また桃も李も、それぞれ美しい花を咲かせるが、その花の形や色はもちろんのこと、木の大きさや開花の時期なども、まったくちがう。それぞれが独自の開花の儀式を繰り返し、年々、自身を輝かせて咲く。しかも、どれ一つとして、ほかのものには代われない。桜には桜にしかない、梅には梅にしか

ない、色合いや香りや可憐さで、自分だけの持ち味を最大に引き出しながら、花をつけ、実を結ぶ——。人間の社会も原理は同じです。皆がかけがえのない尊き存在です。誰もが自分自身の尊厳を輝かせて、自由と幸福に生きる権利があります。(池田・趙 (2005) pp.173-174より)

- iv 小説『新・人間革命』第26巻「厚田」の章pp.57-59より一部抜粋
- v 聖教新聞掲載「池田名誉会長の写真紀行 光は詩う 第1回兵庫 秋桜の風」より

参考文献

- 池田大作 (1999) 「池田名誉会長の写真紀行 光は詩う 第1回兵庫 秋桜の風」『聖教新聞』1999年9月19日付 聖教新聞社
- 池田大作 (2014) 『新・人間革命』第26巻 聖教新聞社
- 池田大作監修 (2021) 『日蓮大聖人御書全集新版』創価学会 (新版)
- 池田大作・趙文富 (2005) 『人間と文化の虹の架け橋』徳間書店 (『池田大作全集』第112巻 (2011) 所収 聖教新聞社)
- 堀日亨編 (1952) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会 (御書全集)

講師紹介

久本雅美 (ひさもと・まさみ)。女優。タレント。大阪市生まれ。1981年、劇団東京ヴォードヴィルショーに入団。1984年、柴田理恵らと劇団・WAHAWA本舗を設立。以後、舞台演劇での活動を中心に、テレビのパラエティ番組、お笑い番組、ドラマ、CM等にも多数出演。フジテレビの人気番組「笑っていいとも」に1993年から2010年まで17年間レギュラー出演した。NHK放送文化研究所による「好きなタレント調査」で2001年度から2003年度まで3年連続で女性部門1位となった。著書に『マチャミの今日も元気です！久本雅美対談集』(潮出版社、2002年)、『人に心を開いてもらいたい時、私が必ずやること、やらないこと。』(TAC出版、2016年)、『みんな、本当はおひとりさま』(幻冬舎、2021年) などがある。